

## ▶▶ 解説

## 1. 写真を撮ることは世界を解釈すること

カメラ機能の付いたスマートフォンや携帯電話をいつも持ち歩いている人も多いと思います。きれいな景色を見たとき、おいしいものを食べたとき、忘れないためのメモ代わりにシャッターを押す人も少なくないでしょう。写真を撮るということはごく日常的な行為になっています。そのような写真を撮る行為には表現についてのメディアリテラシーの学びが詰まっています。かつて哲学者のスーザン・ソントグは「写真は絵画やデッサンと同じように世界についてのひとつの解釈なのである」と述べました（ソントグ1979=2003:13）。ソントグの指摘のように、写真を撮ることは世界を解釈することと捉えることができます。ここではそうした世界の解釈に意識的に取り組むカメラ撮影を「写真実践」とよびたいと思います。本章では、身近なカメラ機能を用いた写真実践からみなさんのものの見方を広げ、さらにステレオタイプを越えた自分なりの視点で地域や社会を語ることにについて考えていきたいと思います。

## 2. 「ものの見方」を意識しよう

ソントグの「写真は世界の解釈」という主張についてももう少し具体的に考えてみましょう。ソントグは、写真を撮るということは「どの個人が見るかということの証拠であり、ただの記録ではなく、世界の評価」と述べています（ソントグ1979=2003:95）。私たちが思わず足を止めて公園に咲いている花の写真を撮るとき、そこではひとりの個人の「きれい」「鮮やか」「可憐」といった美意識にもとづく評価がなされ、自分を取り巻く世界のなかからその花を主題として写真を撮る選択が生まれています。加えて、撮影時にはアングルや光の当たり方など、どのように撮るとその花の美しさを伝えられるかという表現の

工夫が検討されるでしょう。そこで起きていることは、自分なりに見出した美しいという世界に対する意味の付与です。世界への解釈であり、つまり自分なりのものの見方であり、そのものの見方は撮られた写真によって可視化され、人の目に触れられるようになるのです。そうした「写真を撮る行為＝どう世界を見ているのか」に意識的になることで、みなさんのものの見方を見つめなおすメディアリテラシーの学びになります。

では、意識的になるとは具体的にどうすればいいのでしょうか。簡単な方法に、他の人の写真と比べてみるということがあります。一緒に旅行に行ったり、大学祭でイベントに参加したり、同じ経験や時間を過ごしたあとで、その間それぞれが撮影した写真をみんなで見てみましょう。同じ場において、同じ経験をしていたはずなのに、自分とは違うものを撮っていたり、同じ場面でも人物のアップや背景が多いなど撮り方が異なっていたり、自分とは異なる眼差しや伝えられる印象に気づくと思います。こんどは自分もそうした写真を撮ってみようと思うかもしれません。同時に、他の人の写真と比べてみて初めて自分のものの見方を認識することができるでしょう。自分でも気づかぬうちに自分自身がある特定の見方をしているということに気づくかもしれません。

図11.1.は写真を撮る行為を図示したものです。私たちは現実世界をカメラのファインダーを通してのぞき、写真のフレームに沿って〈現実〉を切り取ります。現実を〈現実〉と書くのは、それが手つかずのそのままの現実ではなく、これまで述べてきたような写真を撮るなかでなされる解釈された現実であることを示しているからです。そして〈現実〉として、何をどう切り取るのかが私たちのものの見方の表れであり、そこにはみなさん自身の世界への評価や見出された意味が付与されるのです。そうした物事を見る目を「パースペクティブ」とよびます。他の人と写真を比べるという行為は、フレームによって枠づけられる切り取られる〈現実〉が複数あることへの気づきになるでしょう。自分のフレームの外にはまだ多くの現実世界があり、多様な切り取り方がある、ということ

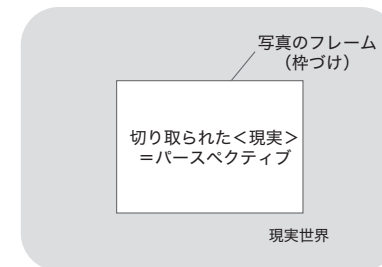


図11.1. 写真による枠づけとパースペクティブ。